# テオプラストス『植物誌』の翻訳を終えて

小川 洋子（昭41史）

**50年近い年月原典のギリシア語と向き合い、テオプラストス『植物誌』全3巻の翻訳を完成させた小川さん。添えられた植物のイラストも、丁寧に描き続けてこられたご本人の手によるものです。綿密な解説・訳注によって現代に蘇らせた業績が高く評価され、2025年度日本翻訳家協会賞〈翻訳特別賞〉を受賞されました。**

テオプラストス『植物誌』の訳書を『植物誌』1・2・3（京都大学学術出版会、2008年、2015年、2025年6月）として上梓しました。テオプラストスは古代ギリシアの哲学者アリストテレスの友にして後継者、『植物誌』はアリストテレスが開設した学園リュケイオンでの講義録で、前314年頃書かれ、修正し続けたとされます。リンネは、これを近代以前では最高の植物学書と高く評価し、テオプラストスに「植物学の祖」の名を献じました。

テオプラストスは自ら広く観察をし、インドに至るヘレニズム世界からの情報も集め、実証主義に徹して研究しています。約500種の植物について精緻な観察記録を残し、植物を形態の差違によって高木、低木、小低木、草本に分ける分類法の基礎を確立しました。さらに単子葉類と双子葉類などの重要な概念を発見し、当時の通説だった目的論や、自然発生論を批判し、植物の生育と環境の関連を生態学的に捉えるなど、18、19世紀の理論を先取りしています。そのうえ木材利用、木炭の製造と利用、花冠を作る植物や果樹、野菜やハーブ、穀物や豆類など、農作物の栽培や利用、香料植物、薬用植物について、基礎研究に裏打ちされた、優れた応用学研究もしています。植物が自然資源として重要だった時代ならではの研究です。その意味で、『植物誌』は植物学の原点であり、応用学の原点なのです。

古代ギリシアは迷信や俗習が横行する社会でしたが、テオプラストスは極めて合理的、科学的に批判し、一蹴しています。当時は、哲学者たちが伝統的な神々に対する懐疑を抱き、原子論のような物質主義的な考え方も知った時代でしたから、テオプラストスは宗教的束縛から自由で、科学的に考えられたのでしょう。テオプラストスは、アリストテレスの経験主義的、実証主義的姿勢を継承しましたが、思弁的な解釈を避けたので、植物研究ではアリストテレスを凌駕したと言われています。

2300年以上も前の『植物誌』の卓越した観察記録と先見的洞察は、自分の目と頭で成し遂げられたのでした。AI時代に生きる我々に、人の目や頭に内在する力への信頼を呼び起こし、また、応用学偏重に傾斜する今の時代に、応用学は基礎的研究があってこそ、高度なものになりうることにも気づかせてくれるのではないでしょうか。この書物が読み継がれていく価値はそこにもあると思うのです。

私が『植物誌』の翻訳を志したのは約50年前。恩師の村川堅太郎先生が「家でもできるから」と古典の翻訳を勧めて下さったからでした。ギリシア語との縁は、お茶大入学直後、聖書を読むためのギリシア語教室に聖書研究会の先輩と通ったのが出発点です。その後、東京教育大でのギリシア悲劇の輪読会や言語学科の演習にも出席させて頂きました。さらにギリシア史を学びたいと史学科の先生に申しましたら、3、4年の二年間、東大の村川先生の特殊講義を聴講できるように計らって下さいました。卒業後は東大の大学院に進んで、古代ギリシア史の研究を始めたのでした。先生に翻訳を勧められた当時は、私は家事、育児にかまけていて臆するところもあったのですが、これは天啓と思い、勇躍、翻訳に取り組んだのでした。

しかし、『植物誌』の翻訳は順調には進みませんでした。組織に属さない非常勤講師だったので大学への文献へのアクセスが困難でした。また、当時唯一の現代語訳（英語）付きの校訂本（1916年刊）の植物同定は酷評されていたが、参考文献も乏しかったので、疑問を残したままやっと訳し終えた1988年に、1916年版に基づく邦訳が出てしまい、翻訳を諦めかけました。ところが、幸いにも、1980年代、欧米でテオプラストスに関する研究書、論文が続々と出始めました。とくに、世界的に高い評価を得た新しいフランス語訳註付きの校訂本（1988－2006年）の刊行が始まったのです。そんな折、30年前京都に転居後、京大の藤縄謙三先生が西洋古典学叢書のために翻訳するよう勧めて下さいましたので、新しい成果を取り込んで訳し直しました。その際、文献へのアクセスに難儀していた私に、京大の先生方が京大の蔵書を閲覧できるようお力添え下さったのは本当に有難いことでした。

難渋したのは同定問題でした。テクストの記載と過去に同定された植物を文献で照合し、実見して確認せねばならないからです。その際、植物学だけでなく、園芸学、林学、農学、本草学など応用分野の勉強も必要で、独学したのですが、菌類学者の夫に折々教えを乞えたのは幸いでした。ところが、日本では、気候が違うためにギリシア固有の植物の多くが見られません。大勢の方から種子や植物を頂き、自分でも栽培して成長過程を観察し、国内の植物園や薬草園を訪ね、海外にも植物を見に行きました。ギリシアでテクストの記載通りの植物を見つけた時は狂喜したのでしたが、固有の植物ほど現地では至る所にあることを知ったのでした。植物を見るときは、写真を撮り、絵を描いてきました。絵の方が、特徴が分かり易いこともあるからです。その一部を出版社が口絵や挿絵にしてくれたのは、この本のために本当に有難いことでした。

『植物誌』の翻訳はこうして多くの幸運に恵まれ、大勢の方にお世話になったお蔭で完結できたのだと深く感謝しています。翻訳する間、植物学を学ぶのも、植物を観察し、絵に描いていくのも楽しく、時を忘れていました。終ってみたら、50年近くもたったのに気づいて驚いたくらいです。今は、『植物誌』に出会ったこと、翻訳し、それを大勢の方に読んで頂けるようになったことを本当に幸せと思っております。今回の受賞を励みにして、これからも西洋古代の植物、特に香料植物、薬用植物に関する翻訳と研究を続けたいと思っております。

**『植物誌』の口絵より**

①「ドラコンティオン δρακόντιον」

大きな肉穂花序（約50cm）と蛇（ドラコーン）に似た葉柄にちなむ名を持つ。人も動物も殺す有毒植物（サトイモ科）。学名*Dracunculus vulgaris*。

②サフラン

用途は料理用でなく、高価な黄色染料だった（アヤメ科）。ギリシア名「クロコス κρόκος」学名*Crocus sativus*。

**2026年度京都支部公開講演会**

『植物誌』個人完訳の道程などについての小川さんの講演です。

日時：2026年6月20日（土）
10：30～12：00

場所：京都府立京都学・歴彩館（地下鉄烏丸線北山駅［出口1］徒歩4分）

申し込みはこちら